

近世の三大飢饉

科学文明の発達した昭和の現代においても、飢饉は恐るべき天災である。江戸時代の天明飢饉について、まるで現代の我々を警告するかのように「太平の御代になれ、用心を忘れて、その備えを怠り、うかうかと過せば、飢饉は幾十年かごとに必ず襲いくる大難なり。平素食物を貯えること第一の心得なるべし」(和泉利平『墨海山筆』)と、平生の食糧備蓄の重要性を説き、昔からの言い伝えにもある「三年の蓄え無きは国に非ず」の教訓を、経験的に裏づけている。

ウンカ地獄の天災型・享保飢饉

昭和59年(1984年)の現代からちょうど253年前の、江戸時代は享保17年(1732年)に起きた享保の大飢饉は、西日本に甚大なウンカの害をもたらした。この年の7、8月になると、近江(滋賀県)・伊勢(三重県)から、西日本一帯にウンカの大群が発生し、大量の稲の実を食い尽くした。

この飢饉の前代未聞の有様は、「西国表の国々、稲虫に雲霞(ウンカ)という虫生じ、次第次第に隣国へ移り、五畿内近所迄参り候、其虫後に形大に成り候、こがね虫の様に成り候、西国表方言、此虫を実盛(サネモリ)と申し候、甲冑を帯したる形にて羽あり、一夜の間に数万石の稲を食べ候由」(『月堂見聞集』)と書かれているから、ウンカの害は、実にすさまじいほどである。この計算方法をそのまま採用すると、たとえば百万石の大名といえども、ウンカのために、わずか1月ほどで、丸裸となってしまうわけである。

浅間山の噴火で火水攻めの天明飢饉

信州(長野県)の大噴火した浅間山は、天明3

年(1783年)7月4日に、住民を火攻め(焼け石)、水攻め(河川の決壊)したうえ、天明の大飢饉に拍車をかけた。この噴火の激烈さについて、『農諭』は次のように述べている。

「浅間山自焼 斯て七月になりしかば雨にまじりて砂を降らし、或ひは風につれて白き毛の如きもの此あたりまで飛来れり。又大地のふるふ音して夜も昼も聞えけり。え(これ)はいかなる事やらに、不思議なりとて人々打より云あへり。是は信濃国浅間山の焼出しにて、其火勢の轟く音遠くも響き渡りて聞へしにぞ有ける。」それから“その勢いの恐ろしさ”を具体的に述べ、さらに“焼石攻め”と“熱湯攻め”の大自然の暴威にふれ、その被害については、家屋が1,783軒、溺死者は3,078人の多数に及んだと述べている。

幕末動乱を激化した人災型・天保飢饉

江戸時代の最後の天保飢饉は、やはり大規模であって、とくに全国的な凶作はだんだんと深刻さを示し、天保7年(1836年)に始まる天保の大飢饉となった。翌天保8年(1837年)に起こった大塩の乱は、その原因を一口で言うと、やはり“飢饉”である。ほかに、いろいろな説があっても、多くはあて推量である。

天保の飢饉の餓死者は、寺院の過去帳などから計算して、岩手県のみで122,284人以上と推定されるから、全国ではこれをはるかに上まわる餓死者があったと思われる。

(国立国会図書館主査 中島陽一郎)

大飢饉の村郷ハ

食物の類も乏

一品も乏く牛馬の

肉ハ乏も更あり

犬猫までも喰せ

これどもつひに余と

保ち得びしと豫死

せしと救ふあり



山統圖録

洞行社藏版

四ツ足禁食のタブーを破った天明の大飢饉——「凶荒図録」より（国立公文書館蔵）

凶荒図録

同人社齋版

其三

